

『魯迅と藤野先生』

寺島 実郎 三井物産戦略研究所 所長

講演会 於 マツヤサロン

1. 魯迅の日本留学

2002年4月は魯迅が日本留学して100周年に当たると聞きました。本日は魯迅と恩師藤野巖九郎先生との話を中心にわが国の市井の人々の素養と云うものにふれたいと思います。

先ず魯迅について

魯迅の本名は周樹人。1881年9月紹興生まれ、そこは中国酒、老酒の代表として有名な紹興酒の故郷で、ちなみに魯迅が医学を学んだ土地、仙台と紹興とは姉妹都市の関係を作るべく模索しています。生家は清朝末期の典型的な地方素封家で、祖父は科挙試験に合格し進士として清朝の官位を得て「内閣中書」の地位まで就いた名家でした。

1898年、16才の魯迅は南京の江南水師学堂に入学、半年で退学し、新設された鉱務鐵路学堂に再入学。ここでの勉学が、西洋の科学技術への目を開かせ、魯迅の思考に、観察力に、論理性を兼ね備えさせました。

1902年4月、魯迅は日本留学のために南京から船で横浜に着き、嘉納治五郎が清国の留学生向けに開設した東京弘文学院に入学、2年間牛込にある寄宿舎に住み日本語を学びました。

1904年、医者になることを決意、仙台医学専門学校に入学、その頃まだ東北大学は創立されていません。

魯迅の仙台留学は、ちょうど日露戦争の時期と重なり、極東の島国日本が、明治維新を背景に近代化を急いで30年、日清戦争に勝ち、日英同盟を支えとしてロシアと戦うと云う、日本人の民族意識がもっとも高揚していた時期でした。

魯迅の祖国清国政権は、1900年、義和団の鎮圧で、やむなく列強の助けを借りますが、列強はそのままねじ伏せるように、首都北京へと進駐し、それを嘆く中国人の悲しみは深く、列強に対抗するには西欧流の近代化を急ぐ必要性があると説く勢力が日増しに強くなる時代でした。このような時代背景の中では、魯迅の仙台での医学の勉強は、決して愉快的ものではなかったと思われまます。さらにシンボリックな体験をしました。

それは日露戦争を伝えるいわゆる「幻燈事件」です。その幻燈を学友達と観た魯迅は、ロシアのスパイだという嫌疑をかけられた中国人の処刑シーンを、同僚学生達が拍手喝采する、その場に居合わせて、また、同胞が処刑される場面を見る同胞の虚ろな傍観者たる表情を見て、衝撃を受けたのです。

中国社会に根強く存在し続けた「馬々虎々・マーマーフーフー」の土壌である、何事も受け身で、情勢を受け入れてしまう欺瞞を含むいいかげんさと闘った魯迅ならではの感情でした。「阿Q正伝」はこのために書かれたのではないのでしょうか。ここで考えてみたいのは、どうして、幻灯シーンを観て同胞より

人一倍いきどおりを感じたのであろうかと云うことです。

中国では、1900年代初めから、儒教など古来守り続けた昔ながらの伝統を打ち破り、ヨーロッパの如く近代的な国にしようという気運がインテリ層にありました。

魯迅は、科挙試験を合格した官僚の家柄の出で、地方の名家の出身のインテリであること、これが本日の第一番目の視点であります。

清朝は、1912年に倒れ、混乱期に入ります。中国史上、政権は何度変わっても国の背骨である官僚組織の制度は変わらず、永らく続いてきた科挙試験を1905年、中国近代化のさまたげとなるとして廃止。それに代わるものとして、清朝政権は、国の将来を託す青年を、西欧、日本に国費留学させたのです。ですから、日本へ魯迅以外にも前途有望な多くの青年が、留学を志したのです。

魯迅は地方素封家のインテリ層の出身で、科挙試験に代わる国費留学生として日本に来た、しかも、中国人特有のあいまいさを受け入れることに嫌悪感を感じる多感な青年であったと云うことです。

以来、医学など少しも大切でないような気がしたとして、文芸をもって、中国人の「馬々虎々」精神を改めさせようと、仙台医専を中退し東京に帰るのでした。

民間外交の大切さを私達は口にします。おおかたの留学生としてきた外国人の学生の資質背景を考えますと、彼らは国を代表するインテリであり、文化人であるので何事にも平均化した日本人が、彼らと友好的に付き合うには、日本人としてかなりの文化度（民力）が必要であることが分かります。ここが民間外交の難しさであります。

魯迅にとり、民間外交の素晴らしさを演出してくれた日本人が仙台にいました。

2 . 藤野巖九郎先生

私は、父が炭鉱会社の労務担当の役員であった関係で、父の転勤に合わせ、各地を転々としましたが、ちょうど、札幌の旭が丘高校にいる時、魯迅の「藤野先生」を読みました。

魯迅が上海で死去したのが1936年ですから、その前年には岩波文庫から「魯迅選集」が出版されており、現在、魯迅関係のホームページがいろいろあることを考えると、魯迅の小説はわが国の人々に根強い人気のある読み物であることが分かります。

藤野先生とはどんな人物だったのでしょうか。仙台医科専門学校の解剖学の先生として魯迅に接した藤野は、福井県出身で、名古屋の愛知医科専門学校を出て仙台で教壇に立っていましたが、仙台医専が東北帝国大学の医科となる際、教授となれず、やむなく故郷の福井に帰り、町医者として一生を送りました。謹厳実直を絵に描いたような人物で、終戦の年1945年8月に往診の途中で倒れ、71才の生涯を終えた市井の人でした。その藤野が魯迅に示した好意とはどのようなことで、なぜそのようなことが自然に出来たのか、このことを考え

てみたいと思います。

仙台医専で、解剖学の講義を担当した藤野は魯迅の日本語が十分でないのを見て、講義ノートを持ってくるように指示し、講義の度に魯迅のノートを文法の誤りまで含め朱筆で添削したと云うのであります。魯迅の感動は深く、仙台を去るに当たり、魯迅は藤野先生の写真をもらった。裏には「謹呈周君惜別藤野」と、書かれている。魯迅はこの写真を中国に帰国した夜に机の前に貼り、「夜ごと仕事に倦んで怠けたくなるとき仰いで、灯火のなかに、彼の黒い痩せた今にも語り出しそうな顔を眺めると、たちまち私は良心を発し、かつ勇気を加えられる。」と語るほど、この写真を大切にしました。

福井県芦原町に藤野巖九郎記念館があり、その隣には診療所を兼ねた藤野の旧居が移築され、展示物もよく整理され、気持ちのこもった管理がなされています。

北京の魯迅博物館の許可を得て撮影してきたという仙台医専時代の魯迅ノートの写真を見ると驚かされます。6冊の装丁されたノートの記述の緻密さは驚嘆すべきものであり、先生が添削したという赤ペンの記述も若干の加筆修正程度のものでなく相当な時間を費やして書き入れたものであることが分かる。どうして、やがては一介の町医者となる市井の人が、日常生活の中で、一人の中国人留学生に温かい思いやりを示す人物たりえたのかという疑問が残ります。

魯迅関係のホームページを見ていると面白い資料が出てきます。魯迅の死去を知らされた藤野先生は、「謹んで周樹人様を憶う」(『文学案内』昭和12年3月号掲載)という文を作っています。これを読みますと、周樹人つまり魯迅の仙台医専時代の思い出を語っています。添削の件はこのように記されています。「私の受け持ちは人体解剖学で、教室内ではごくまじめにノートをとっていましたが、何しろ入学された時から日本語を十分に話したり、聞いて理解することが出来なかった様子で、勉強には余程骨が折れたようでした。それで、私は時間が終わると居残って周さんのノートを見て上げて、あの人が聞き違いしたり誤っている処を訂正補筆したのでした。異郷の空に、それも東京というなら沢山の同胞留学生も居たでしょうが、仙台では、前にも云いましたように周さん只一人でしたから淋しいだろうと思いましたが、別にそんな様子もなく講義中は一生懸命であったと思います。」

魯迅のノートを添削したと書いてありますが、そんなに大それたことをしたわけでもないのですよと云わんばかりの文章です。

ではどうして、このような親切なことが自然に出来たのでしょうか。答えはこの文章の先に出てきます。

「私は少年の頃、福井藩校を出て来た野坂と云う先生に漢文を教えて貰いましたので、とにかく支那の先賢を尊敬すると同時に、彼の国の人を大切にしなければならぬと言う気持ちがありましたので、これが、周さんに特に親切だとか有難いという風に考えられたのでしょう」

医者であった藤野がいかに深い漢籍への造詣を有していたか、8才の頃から

旧福井藩士であった野坂源三郎の私塾に通い、漢籍、算術、習字を習った。日本各地に似たような漢籍教育システムが機能していたのです。

野坂から受けた漢学によって、中国文化への尊敬と中国人への親しみを持つようになり、何時か、恩返しをしたいという気持ちを持つに至ったのでしょう。

明治という時代には、まじめで、慎み深く、しかも文化度の高い市井のインテリがいて、背骨は漢学の教養で貫かれていた、このような日本人が沢山いたのです。

3 . 中国残留日本人孤児問題

中国との関連でもう一つ思いをめぐらせたいことがあります。それは、中国残留日本人孤児問題です。残留孤児の訪日調査も、多くの日本人にとって、この話も色あせ、「まだそんな話があるのか」「肉親が見つからずかわいそう」というのが、若者の率直な印象だと言われています。しかし、この話はわれわれに強烈なイメージを発信してきていると言わざるを得ません。

中国人の立場からすれば、中国大陸に押し出てきた日本人が「敗戦」というパニックを迎え、混乱の中で残していった子供を中国人は育てたのである。しかも、ここで忘れてならないキーワードも「市井の人」であり、村の普通のおじさん・おばさんが、泣いている日本人の子供を「お前もきて飯を食えよ」といって育ててくれたのです。残留孤児の人たち一人一人にドラマがあるのですが、総じて自分の生活さえ楽ではない中国人が子供たちを育ててくれたのです。想像力を働かせてみましょう。もし逆に中国人が日本に攻め込み、日本に子供を残して逃げ帰ったとして、どれだけの日本人が「お前もきて飯を食え」という度量を見せるでしょうか。

私は中国人の懐の深さが我々の参考にならないだろうかと云っているのですが、どんな国にも心の寛い人もいれば狭い人もいます、しかし、市井の中国人が何千、何万単位の子供を、あの愁嘆場の中で育てたという事実は重いのではないのでしょうか。混乱の中にこそ民族の無意識の品格が表れる。アジアの長男意識とでもいいでしょうか、混乱のなかでも中国人には「暴れ者の迷惑な弟が残していった子供でも、まあ育ててやるか。」といった意識が市井の人たちの心に存在していたのであろうと思っています。

なぜ、日本には心の寛い人が、徳を求める人が少なくなったのか。戦後の日本の市民が求めて来たものは、何よりも生活の向上でありましたが、生活の向上を維持する為のモラルを何時しか見失ってきたのではないか。

明治の時代まで、永らく市井の人々により貯えられ、活用されてきた漢籍の教養、簡単に云えば、「勸善懲悪」「温故知新」などの精神が消え去らんとする今、漢籍に備わる人としての基となる教養と価値判断の基準を何とすればよいのだろうか。正に民衆の英知が必要とされる時代となっていると考えます。

2002年4月、魯迅が日本留学して100周年、2004年4月が仙台医専に学んで100周年で、魯迅の学術資料を掘り起こそうと云う運動や、記念事業の運動

も起きつつあると聞きます。私ができることがあれば喜んで支援させて頂きたいと存じます。

講師：寺島 実郎氏 プロフィール

(株)三井物産戦略研究所 所長、(財)日本総合研究所 理事長

1947年 北海道生まれ 1973年早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了

1973年 三井物産入社 調査部・業務部を経てブルッキングス研究所(ワシントンDC)に出向 その後、米国三井物産ワシントン事務所長等を経て現職に到る

現在 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授も務める

著書

「地球儀を手に考えるアメリカ」東洋経済新報社 1991

「ふたつのFortune」ダイヤモンド社 1993

「新経済主義宣言」新潮社 1994 (第15回石橋湛山賞受賞)

「ワシントン戦略読本」新潮社 1997

「国家の論理と企業の論理」中公新書 1998

「団塊の世代 わが責任と使命」PHP研究所 1999

「1900年への旅」新潮社 2000

「正義の経済学ふたたび」日本経済新聞社 2001 など